今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第二十一回は、今治市の伝統工芸の一つ・菊間瓦のルーツを紹介し、地場産業として根づく江戸～明治時代の様子と鬼師の系譜を歴史散歩したいと思います。

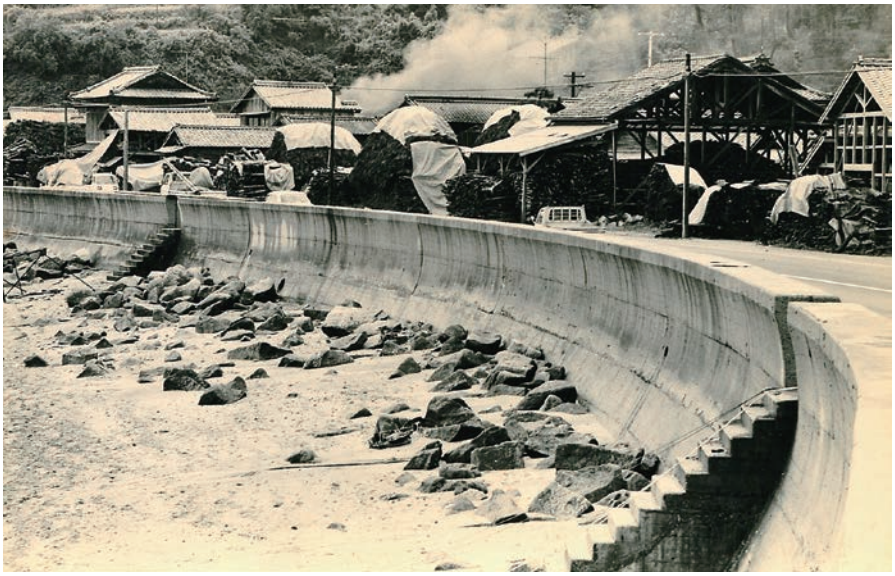
第二十一回 菊間瓦のルーツを訪ねて

●身近なルーツ／二六軒株

菊間瓦の起源は諸説ありますが、身近なルーツは藩政時代の株仲間・二六軒株にさかのぼります。松山藩では、領内で瓦の製造・販売を行う業者を五三株に制限し、このうち半数の二六株を菊間の業者に与えました。これらの窯元は、野間郡浜村の船ケ浦（菊間町浜の西海岸）に拠点を構え、藩の御用瓦を手がける一方で、近郷寺社の瓦製造などを行いました。

御用瓦では、文政十（一八二七）年に松山藩大坂屋敷、安政二（一八五五）年に松山藩江戸屋敷、元治元（一八六四）年に松山藩京都本陣などがあります。近郷寺社では、天保二（一八三一）年の浜村荒神社の灯籠や同四年の遍照院庫裏棟鬼瓦（かわら館所蔵）などが知られています。

浜村の荒神社は、火難除けの神として永く瓦業者の信仰を集めました。現存する瓦製の灯籠は、高さ約二・七mもあります。台座に刻まれた施主名は、二六軒株の親方連中でしょうか。火袋の「金」の透かし字は金毘羅大権現を意味し、海上安全の願いが込められています。



昭和30年代頃の西海岸［写真／錦松工房提供］

菊間が瓦産地となった背景には、現地で原料の瓦土と窯焚き燃料の松の薪・松葉が採れたことや粘土瓦の乾燥と窯の焼成に適した温暖少雨の気候風土などがあげられます。さらに、物流の大動脈・瀬戸内海沿いにあることで、瓦の積出港にも適していました。不足する瓦土・薪についても、船で近郊から運ばれてきました。

荒神社の瓦製灯籠
（今治市指定有形文化財／今治市菊間町浜）

●飛躍のルーツ／皇居御造営瓦

明治以降は、政府の大口注文が菊間を潤します。明治八（一八七五）年の小倉兵営・丸亀兵営の御用瓦七万枚、同十年の広島鎮台御用瓦七万枚、同十一年の松山兵営御用瓦一三万枚、同十五年の佐世保鎮守府御用瓦二八万枚など軍需御用が相つぎました。

一方、廃藩置県で株仲間が廃止されると、二六軒株以外にも瓦製造を始める業者が現れます。明治十四年には浜村だけで四三の業者が存在し、老舗業者と新規業者との反目、需給バランスの崩れや品質の低下など、菊間瓦は大きな壁にぶつかりました。これを解消すべく、五四の業者が集まって同一九（一八八六）年に組織したのが、菊間瓦最初の互助組合「菊間製瓦組合」でした。

設立のきっかけは、明治十六年に宮内省から御下命を受けた皇居御造営瓦の製造で、同十七年から十九年にかけて二二万枚を納入しました。政府への斡旋は、旧松山藩主の家系・久松定謨伯爵や愛媛県の働きかけがあり、見本に送った瓦が特選の栄誉を受けました。この時、御用命を授かるのは三州・泉州・菊間の三産地で、製造にたずさわる請負業者と職人は利害関係をこえて製造に励んだそうです。現在、その請負業者の子孫宅に、皇居御所鬼の木型が残され、当時の平瓦・丸瓦のサンプルが「かわら館」に展示されています。

皇居御所鬼の木型（写真提供／安永道一氏）

●鬼師の活躍／菊間公民館の壁面瓦

鬼瓦や飾り瓦を手がける専門職人を鬼師といいます。今日でも、老若男女数名の鬼師が菊間で活躍しています。愛媛県武道館中庭の大鬼瓦は渡部一馬氏らが手がけたもので、菊銀製瓦の菊地晴香氏は全国でも珍しい女性の鬼師です。また、独自のブランド「かわらや菊貞」で瓦工芸作品を手がける小泉信三氏がいます。

二六軒株の時代に、西原屋の屋号で鬼瓦を手がけた錦松工房は、現在の光野幸士氏が九代目です。店名は、六代目松四郎の田舎相撲の四股名（錦松）から名づけたものです。松四郎は、昭和三十年代に広島城・小倉城の鬼瓦（鯱）を、弟・武三郎は松山城小天守の鬼瓦を手がけました。兄・亀太郎は、お供馬で有名な加茂神社の神馬を瓦でつくったことでも知られます（頭部のみ、かわら館に保管）。親兄弟が切磋琢磨するなかで、匠の技は伝承されていきました。

菊間公民館ロビーの大壁面瓦は、昭和五十七（一九八二）年に菊間町窯業協同組合が制作しものです。そこに象られた双竜は、錦松工房七代・八代目の光野貫一郎・公平兄弟が手がけたものです（ともに故人）。貫一郎は「現代の名工」、公平は「県伝統工芸士」にも選ばれた腕利きの鬼師で、かわら館ロビーのお供馬のレリーフは貫一郎晩年の作で知られています。

菊間公民館ロビーの龍の壁面瓦　鬼師の光野貫一郎（右）・公平兄弟［写真／錦松工房提供］